令和四年度

第一学年　前期中間テスト

令和四年六月十日（金）実施

Ⅱ　国　語

教科書から
・16，17ページ「朝のリレー」
・20〜27ページ「竜」
・34〜36ページ「音声のしくみとはたらき」
・40〜42ページ「ペンギンの防寒着」
・44〜49ページ「クジラの飲み水」
漢字練習ノートから
・8〜17ページ

1　はじめのチャイムが鳴ったら冊子を開き、ページを確認して問題を解き始めてください。

2　わからない問題にこだわらず、できる問題から解きましょう。

3　解答は、解答欄に丁寧に記入してください。

4　指示がなくても漢字で答えるようにしましょう。

5　解答用紙にマス目がある場合は、句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れましょう。

6　問題文を最後までよく読み、答え方に気を付けて解答しましょう。

7　二度書きをせず、消しゴムも気を付けて使用しましょう。

8　終わりのチャイムが鳴ったら、すぐに鉛筆を置いてください。

一年	組	番	氏名

〔一〕次の問いに答えなさい。(25)

問一　次の傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。必要であれば送り仮名も書きなさい。【知各1】

①トツゼン雨が降る。　②糸をコウカンする。　③魚ツリがうまい。　④コシを曲げる。
⑤ねこがイッピキいる。　⑥会員をボシュウする。　⑦シンセンな魚。　⑧ていねいにアツカウ。
⑨服がヨゴレル。　⑩漢字をカイショでかく。　⑪旗をカカゲル。　⑫セイカクに計算する。
⑬技術をクシする。

問二　次の傍線部の漢字の読みを、ひらがなで答えなさい。【知各1】

①隠居生活を送る。　②けがの功名。　③要旨をまとめる。　④語彙が豊富なひと。
⑤多数を占める意見。　⑥姓名を記入する。　⑦ふかく潜る。

問三　次の言葉の音節の数を答えなさい。(例：2つ)【知各1】

①ランドセル　②チョコレート　③サンドイッチ

問四　次の文の□に入る言葉をそれぞれ一字で答えなさい。【知各1】

例えば「たうら」をローマ字で書くと、「ta,u,ra」となる。この中の、「a・u」を①音といい、「t,r」を②音という。

〔二〕次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(13)

朝のリレー

カムチャッカの若者が
きりんの夢を見ているとき
メキシコの娘は
朝もやの中でバスを待っている
ニューヨークの少女が
ほほえみながら寝がえりをうつとき
ローマの少年は
柱頭を染める朝陽にウインクする
この A では
いつもどこかで朝がはじまっている

ぼくらは朝をリレーするのだ
経度から経度へと
そうしていわば交替で地球を守る
眠る前のひととき耳をすますと
どこか遠くで目覚時計のベルが鳴ってる
それはあなたの送った朝を
誰かが①しっかりと受けとめた証拠なのだ

問一　[A]に入る適切な言葉を、本文中から二字で探して答えなさい。【思1】

問二　「朝のリレー」に見られる表現の特徴を、次のア～エから一つ選びなさい。【思2】

ア　「～のように」などのたとえが多用されており、情景を捉えやすくなっている。

イ　人間ではないものの様子を、人間の動作のように表現しているところがある。

ウ　似ている文の形や、似ている意味の言葉を繰り返し、印象を強めている。

エ　ひらがなやカタカナが多用されており、情景を様々に想像できるようになっている。

問三　本文中で、朝の具体的な様子を表している行を二つ探し、初めの五字をそれぞれ答えなさい。【思各2】

問四　傍線部①「しっかりと受けとめた証拠」とあるが、何がその証拠になるのか。次の文の空欄ア、イに当てはまるように答えなさい。【思各2】

僕が[ア]ときに、誰かの[イ]ことが、朝をリレーした証拠になる。

問五　作者がこの詩で伝えようとしていることとして最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。【思2】

ア　朝をリレーすることとは、人と人の思いをつないでいくことである。

イ　世界中の朝の様子はさまざまで、その違いを知っていなければならない。

ウ　朝をリレーすることによって、次の世代に思いをつないでいくべきだ。

エ　朝頑張って起きることが、ぼくらの世界のためになることなのだ。

〔三〕次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(22)

体の長さは山を二巻きするくらいもあり、雲を呼び風を起こし天を駆けることもできるというのに、竜の子三太郎はほんとに気が弱くて、いつもいつも、沼の底でじいっととぐろを巻いて、①息をころしておるのだった。

そして真夜中、そっと鼻先だけを突き出し、ひげを震わせて深呼吸し胸の中の空気を入れ換えるのだった。あとはまたしずしずと底に潜り、じいっと、とぐろを巻いて、息をころしているのである。

そんなふうだったから、長いこと、竜の子三太郎の姿を見た者はいなかった。三太郎の父親の竜大王でさえ、五十年に一度の見回りに来たときにも、息子を見つけるのに、②骨が折れた。あんまり[A]と隠れておるからだったが、おしまいに竜大王はかんしゃくを起こし、

ぐおおおん！

と、鼻を鳴らすので、三太郎もしかたなしに、③ぽっちりと鼻先を突き出すのである。

そんな息子を見て、竜大王はうんざりしてしまい、情けなくて情けなくて、もう文句を言うこともよしにして、ぷいと飛んでいってしまった。

すると三太郎は、さも安心したように、いそいそと沼の底へ戻るのである。これではまるでどじょうではないか。

だが、どじょうと思われることなんか、三太郎にはどうでもよかった。気の弱い三太郎は、人に見つからずに、そっと暮らしていたかっただけなのだ。

（中略）

沼の周りに人がうろうろし始めるようになるのに、何日もかからなかった。楢やんが言いふらしたせいにちがいなかった。

そればかりか、よほどの物好きがいるとみえて、夜になっても帰らない。かがり火などたいて、気長に三太郎

が顔を出すのを待っている様子なのだ。
これには三太郎も困ってしまった。これでは日に一回の胸の空気の入れ換えもできない。といっても、もう一度人間と顔突き合わせることなど思いもよらず、三太郎は、ただただしょんぼりととぐろを巻いておるばかりであった。
そんな三太郎がときどきつくため息が、大きなあぶくになって立ち上り、沼の周りの連中を、
――それ出たぞい！
と、あわてさせる。
ところが、それがまたうわさになり、沼見物の人間の数は増えるばかり。そしてとうとう、沼の周りには、見物衆相手の店さえ建つ始末。
三太郎は、うっかりため息一つ、くしゃみ一つすることができなくなり、すっかり元気をなくしてしまった。
三太郎は、④気の弱い微笑を浮かべながら、沼の底に幾巻きもしている自分の巨大な体を眺めているばかりであった。
とはいうものの、いくら三太郎が気が弱いといっても、そんなに何日も何日も潜りっぱなしでは、胸がつまってくる。胸の中に灰色の砂漠が広がり、舌がざらざらしてくる。三太郎は大きな目をぎょろんとさせ、長い耳をぴんと立てて、上の様子をうかがった。少しでも人のいないおりがあれば、思いきって鼻先を出そうと、やっと心に決めたのである。しんぼう我慢にも、きりがある。
さて、そんな日が何日続いたあとだったか。不思議なことに、あれほどざわついていた沼の周りが、いつやら、以前どおりに、しんとしているではないか。
三太郎は、それでも用心深く、夜半になってから、そろそろそろそろと鼻先を突き出した。ああそのときの夜の空気のうまかったこと。
そのときは、慌ててまた潜ったが、明くる日も、また明くる日も、沼の周りに人の来る様子はない。三太郎はすっかりうれしくなって、ひとつ思いきってとび出してやろうと決心した。
なにしろ、何日も何日も沼の底にくすぶっていたものだから、体中、藻だらけ水ごけだらけ。ぬるぬるねちねちして、気持ちの悪いことおびただしい。そんなときには思いきって飛び上がり、雲に乗って一駆けすればさっぱりするのだ。
三太郎はとうとう心を決め、それから三日したある真夜中、ものすごい勢いで沼の底から飛び出した。沼のまん中から竜巻が起こり、雲を呼んで駆ける三太郎の下に広がる田畑一面に大雨を降らせた。
そのころ日照り続きに頭を抱えていた百姓たちは躍り上がって喜んだ。
――なんでも、あの沼から竜神様が飛び上がったちゅうど。
――やっぱ、竜がござらっしゃったか。
――どんと、祭るべや。
沼の周りに見物に来ていた連中が引き揚げたのもあたりまえ。日照り続きに、竜見物どころではなくなったのであった。
そんなこととは知らぬ三太郎は、久しぶりに風呂に入ったようにさっぱりした気持ちで、また、ずぶりと沼に身を沈めた。
百姓たちが沼の周りにしめ縄を張りめぐらし、立て札を立てていきさつを書き連ねるのにもまた何日もかからなかった。
見物衆が、以前にもまして増えたのはいうまでもなく、三太郎は以前より小さくなっていなければならなくなってしまった。
しかし、けがの功名とはいえ、竜神様とたてまつられるのは、まんざら悪い気持ちでもない。これなら、十年もして、とっつあんの竜大王が見回りに来たとき、ちっとは申しわけも立とうというものだ。
三太郎はそう思うと、頬を赤らめ、⑤気の弱そうな苦笑いを浮かべて、ああんと一つ、小さなあくびをして考

えた。（⑥神様ちゅうもんは、退屈なもんじゃ……。）

三太郎のあぐびは、きれいな緑色のあぶくになって、ゆっくりと沼の中を上っていった。

問一　傍線部①「息をころす」、傍線部②「骨が折れる」の説明として適切なものを、次のア～オからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。【知各2】

ア　息をとめるようにしてじっとしていること　　イ　精を出してはげむこと

ウ　緊張してじっと見守ること　　エ　とても労力がかかって苦労すること

オ　とても腹を立てること

問二　［A］に入る言葉を次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。【2】

ア　どっしり　　イ　しっとり　　ウ　ひっそり　　エ　あっさり

問三　傍線部③「ぽっちりと鼻先を突き出す」について

（1）「ぽっちりと」という言葉は、三太郎のどんな様子を表しているか。解答欄に合うように「～様子」の形で答えなさい。【思3】

（2）「ぽっちりと」のように、**ものの姿や動作などの様子**を言葉にしたものをなんというか。「～語」の形で答えなさい。【知2】

問四　傍線部④「気の弱い微笑」について

（1）「微笑」の説明として適切なものをア～エから一つ選び、記号で答えなさい。【思2】

ア　苦々しく思いながらも仕方なく笑う様子　　イ　あまりのおかしさに思わず吹き出す様子

ウ　緊張がゆるみ笑い声がもれる様子　　エ　声を出さずに口元が少し緩む様子

（2）「気の弱い微笑」を浮かべた心情として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。【思2】

ア　三太郎の沼の周りに村人の店まで建ち、人気になったことが嬉しかったから。

イ　自分はまだ何もしていないだけで、その気になったら何でもできると余裕だから。

ウ　村人が沼の周りにいて、ため息もくしゃみもできなくなり、苦しくなったから。

エ　初めての村人に対して緊張しており、どうやって接していいか迷っているから。

問五　傍線部⑤「気の弱そうな苦笑い」とあるが、この表情を浮かべたのはなぜか。最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。【思2】

ア　三太郎は神様になることを嫌がっており、持ち前の気の弱さが現れたから。

イ　自由に行動できないながらも、神様として祭られる立場を悪く思っていないから。

ウ　村人のために神様になろうと頑張ったが、やはり気の弱さは変わらなかったから。

エ　勝手に自分を神様にした村人を心の中では怒っているが、気が弱くて行動できないから。

問六　傍線部⑥とあるが、三太郎はなぜ「神様」になったことで「退屈」だと感じているのか。考えて書きなさい。ただし、「三太郎は～」で書き始め、「～から」で答えなさい。【思5】

〔四〕次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（一五）

南極のペンギンたちは、真冬にはマイナス六〇度にもなる厳しい寒さの中で暮らしています。人間であれば、ダウンジャケットや厚手のコートなしでは外に出ることさえできない寒さです。

ペンギンたちはどのようにしてこの厳しい寒さをしのいでいるのでしょうか。彼らの体に備わった①保温のしくみを探っていきましょう。

一つめは羽根です。ペンギンは鳥類に属していますが、その羽根は空を飛ぶ鳥のものとは少し違います。一枚一枚の羽根が小さくびっしり生えています。ペンギンの体をほぼ隙間なく覆っているこの羽根は、水にぬれたり海中に潜って水圧がかかったりすると、まるで全体が一枚の柔らかい布のようにつながるというしくみになっています。つまり、ペンギンの羽根は、防水性のコートやウエットスーツの役目を果たしているのです。一枚の皮のようになった羽根は、外からの寒さを防ぐとともに、その下の皮膚との間に空気を閉じ込めて、体温の低下を防ぐ空気の層をつくります。成鳥のペンギンの場合、保温効果全体の八〇～九〇パーセントが、こうした羽根のしくみによるものとされています。

②それでは、まだしっかり羽根の生えていないヒナの場合などではどうなるのかと疑問を抱く人もいるでしょう。

その疑問を解決するのが二つめの保温のしくみ、脂肪層です。例えば、キングペンギンのヒナの場合には、体重の約四〇パーセントを占める脂肪層が保温効果の主役となります。

この脂肪層は、ヒナだけでなく成鳥のペンギンにとっても重要なのです。例えば、エンペラーペンギンの場合は、マイナス六〇度・秒速五〇メートルを超える吹雪の中、卵やヒナをお腹のたるんだ皮で覆うようにして温めるのですが、子育て時の親鳥の皮の脂肪層の厚さは二～三センチメートルにも達します。

保温のしくみの三つめは羽根に塗る脂です。ペンギンは陸上でも海上でも時間があればいつもくちばしで羽根の乱れを直します。尾羽根のつけ根の器官から出る脂をくちばしですくい取っては、羽根の表面に塗りつけているのです。羽根に脂を塗るという行動は、冷たい海の中に潜って餌となる魚をとるときにはいっそう重要性を増します。もし羽づくろいをせず、羽根の表面を覆う脂がなければ、水中で熱を奪われる量は倍増してしまうという研究データがあります。

③このように、ペンギンは、脂肪層、皮膚、空気層、羽根、羽根に塗られた脂という、いわば五枚の層によってつくられた高性能の防寒着に身を包んで寒さから身を守っているというわけです。

問一　本文全体の構成を序論、本論、結論に分けるとき、本論はどこからはじまるか。初めの五字（句読点を含む）を答えなさい。【思2】

問二　本文全体への「問い」となる一文を抜き出し、初めの八字（句読点を含む）を答えなさい。【思2】

問三　傍線部①「保温のしくみ」とあるが、本文中から三つ、それぞれ二字、三字、六字で抜き出しなさい。【思各2】

問四　傍線部②とあるが、この一文のねらいとして最も適切なものを、次のア～エから選び一つ答えなさい。【思2】

ア　これまでとは全く異なる視点を示すことで、読者に意外性をもたせようとしている。

イ　これまでの説明に不足している視点を、反論の形で示し、読者を引き込もうとしている。

ウ　ここまでの説明をまとめ、読者の目線をこのあとの説明に向かわせようとしている。

エ　読者の疑問に答えることで、説明全体の中で最も重要な事実を伝えるための誘導をしている。